

2022年度入試

入学試験問題集

【東京成徳大学 子ども学部 子ども学科】



東京成徳大学 東京成徳短期大学

目 次

総合型選抜 9月入試 小論文	1
総合型選抜 10月入試 小論文	2
総合型選抜 12月入試 小論文	3
学校推薦型選抜（公募入試／指定校入試） 小論文	4
編入学試験 小論文	5
出題意図	6

「一般選抜 A 日程・B 日程・C 日程」の問題は、
「2022 年度入試問題集 一般選抜 A 日程・
B 日程・C 日程（大学・短期大学）」に掲載
しています。

●総合型選抜 9月入試

【小論文】（試験時間：60分）

以下の文章を読み、子どもの生きやすさについて著者の意見を踏まえ、自分の考えを述べなさい。（600字以内・横書き）

小さいころから、いつも会話が絶えない「仲よし家族」にあこがれていた。でも、我が家は正反対だった。親に学校や友だちのことを話しても、なぜか聞いてもらえない。そのたびに、楽しい思いにふくらんだ心がしぼんだ。そして「自分は何で不幸なんだ」と一人、部屋で泣いた。時には「消えたい」とさえ思った。

昨年の自殺者数は2万1081人。コロナ禍の中、11年ぶりに増えた。

とくに若い女性や子どもの自殺が増えている。外出自粛社会は非正規雇用が多い女性や、家以外の居場所を失った子どもたちを直撃した。有名人の自殺報道もあった。

でも、ほかにも理由はないのだろうか。

徳島県の南部に位置する旧海部町は、きわめて自殺率の低い「自殺希少地域」として知られる。平成の大合併で両隣の2町と合併し、いまは海陽町となった。

旧3町とも過疎と高齢化が進み、人口構成も産業構造も変わらない。それなのに、旧海部町の自殺率だけが突出して低い。社会学者の岡檀（まゆみ）さんはその理由を探ろうと、4年にわたり現地を調査した。謎解きの過程は著書「生き心地の良い町」に詳しい。

私が一番驚いたのは、旧海部町の住民の幸福度が、3町の中で一番低いことだった。そして「幸せでも不幸せでもない」という人が、いちばん多かった。

「本来、人が幸福か不幸かどうかは、簡単に分けられないもの。旧海部町の人には、ゼロかイチかの二元論で物事を捉えない人が多い。そしてその方が、楽に生きられるのです」。岡さんはこう説明する。

今はこの知見をもとに、徳島県内の子どもたちがどうやって「未来を生き抜く力」を身につけていくのか。その過程を追跡調査している。「男のくせに」「女のくせに」など、社会の規範を押しつける大人が周りに多くいると、想定外のことが起きたときに対処できる力が弱まる。そんな傾向が浮かび上がってきたという。

人はだれしも幸せであるべきで、幸せを追い求めるべきだ。近頃、ますますこうした規範が強まっているのか。

ここ10年、国連や経済協力開発機構（OECD）などが各国の幸福度ランキングを出すようになり、日本も指標づくりを検討してきた。経済的な豊かさだけでは幸せになれない、という気づきがベースにある。

でも幸せとは、究極の個人的な主観だ。それを、順位づけや指標化をする時点で、国から「幸せになれ」と脅されているような居心地の悪さを感じてしまう。

4年前、「小さないのち」という企画に携わり、子どもの自殺を減らすために大人ができることを考えた。思春期のときに自殺未遂した当事者の方に話を聞きながら、私がかつて、「消えたい」と思ったときの気持ちがようやく言語化できた。

「自分はみんなとは違う」という孤立感が、とてつもない絶望感を生み出すのだ。

それでも、私が比べた「みんな」は、周囲の友達やテレビで見る世界ぐらいだった。SNSでつながっている今の子どもたちの「みんな」は、桁違いに多いだろう。その上、実生活での幸せぶりをアピールする場でもあるSNSは、幸せへの強迫観念を増幅する装置とも言える。

ユニセフが昨年9月に先進38カ国を比べた調査では、日本の子どもの「精神的幸福度」は37位だった。生活に満足している子どもの割合が低く、自殺率も高いためだ。

「自分だけが幸せじゃない」と思い込み、絶望する子どもたちが増えているとしたら。それは、そんな価値観を強化してきた私たち大人のせいでもある。

禍福はあざなえる縄のごとし¹。もちろん生死にかかわる苦境は、政治や社会が取り除かねばならない。その上で「常に幸せでなくては」というこだわりがなくなれば、この世はもっと、生きやすくなるはずだ。

出典：「多事奏論」岡崎明子、朝日新聞 2021年6月30日朝刊、p.11、東京本社。

¹：出題者註：「禍福はあざなえる縄のごとし」：この世の不幸は、より合わせた縄のように、常に入れかわりながら変転する意。広辞苑第七版、2018、岩波書店

●総合型選抜 10月入試

【小論文】（試験時間：60分）

国立成育医療研究センターの社会医学研究部・こころの診察部を中心としたグループが実施した調査報告書を読み、設問に答えなさい。

設問 表1と表2の結果を踏まえながら、新型コロナウイルス感染症の影響についての肯定的な側面と否定的な側面をまとめなさい。その上で、どのような学校が子どもたちにとって望ましいのかについて、あなたの考えを論じなさい。文字数は600字以内とする。

国立成育医療研究センター（2021）は、「先生や大人への話しかけやすさ・相談しやすさ」、「勉強の大変さ」について、子どもを対象にインターネット調査をした。調査期間は、2021年2月19日から2021年3月31日までであった。

表1と表2は、新型コロナウイルス感染症の影響について調査実施期間までの1年をふりかえって、小学生本人が自分の気持ちに1番あてはまるものを選択した結果を示したものである。小学1-3年の回答者は145人、小学4-6年の回答者は174人であった。

各表のグラフ内の数字は、コロナ（新型コロナウイルス感染症の影響）によって「とても増えた」、「増えた」、「少し減った」、「とても減った」、「増えた、または減ったが、コロナのせいではない」、「増えても減ってもいない（変わらない）」、「分からない・答えたくない」の各選択肢を選んだ人数を、全体の回答者数に占める割合として示したものである。たとえば、表1では、小学1-3年の回答者145人のうち、10%が「分からない・答えたくない」と選択したことを示す。

表1 先生や大人への話しかけやすさ・相談しやすさ

※ グラフ内の数字はパーセンテージを示す

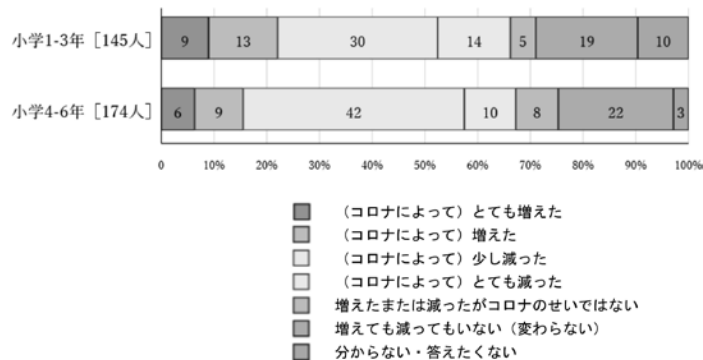
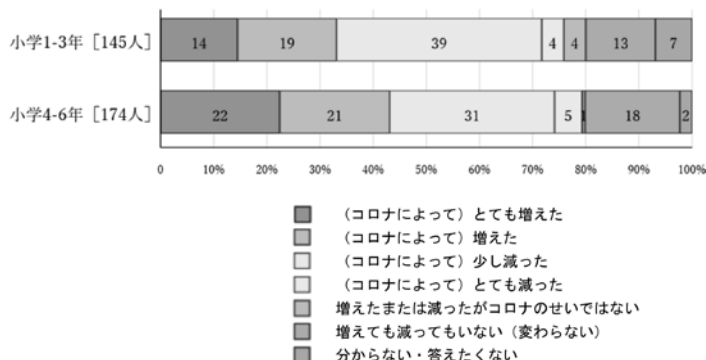


表2 勉強の大変さ

※ グラフ内の数字はパーセンテージを示す



●総合型選抜 12月入試

【小論文】（試験時間：60分）

学校教育への過剰な期待について書かれた以下の文章を読み、設問に答えなさい。

設問 本文の要点を述べたうえで、国や社会が学校に対して過剰な期待をかけていること具体的な例を挙げて、それに対するあなたの考えを六〇〇字以内で論じてください。

子どもや若者の事件が起きると、きまつて「今の教育はどうなっているんだ」という教育バッシングが始まる。個別の悲惨な事件でなくても、フリーターやニートと呼ばれる若者たちが増えたのも、若者のモラルが低下したのも、「教育はどうなっているんだ」という教育バッシングにつなげて論じられる。そこに共通するのは、「教育がおかしくなっているから、〇〇が起きる」という問題の立て方・見方である。

このような発想の裏返しにあるのは、「教育さえしっかりしていれば（あるいは「正しい」教育が行われていれば、〇〇という問題は起きないはずだ」という私たちの教育への期待である。「教育の失敗」を原因と見立て、さまざまな事件や、若者・子どもの好ましくない変化を結果と見る。そういう、原因と結果の結びつきを暗黙の前提に、私たちは日本の教育を問題視するようになった。ところが、多くの場合、その原因と結果の関係が本当に正しいかどうかは検証されない。それでも、好ましくない「結果」が出てくるたびに、教育が問題視される。かりに、教育にその責任の一端があつたとしても、日本の教育には、その身の丈に合った実力以上のことが期待されているのかもしれない。まるで、さまざまな問題を解決できる魔法の杖、あるいは万能薬であるかのように、である。その期待が適切なものなのか、その検証も十分ないまま、教育は魔法の杖と見なされるのである。

十分なお金も、人の手当も、時間も、専門的な訓練も与えられていないのに、実に多様な問題の原因として、教育がバッシングされる。実力以上の過剰な期待をかけていることに、多くの人たちは、気づかないか、気づいてもそのことを忘れているのか、いずれにしても、期待が裏切られるたびに、「教育の失敗」がいわれるようになる。

（出典：刈谷剛彦・増田ユリヤ『欲ばかり過ぎるニッポンの教育』講談社、2009年、ISBN978-4-06-149866-2、p.81-82）

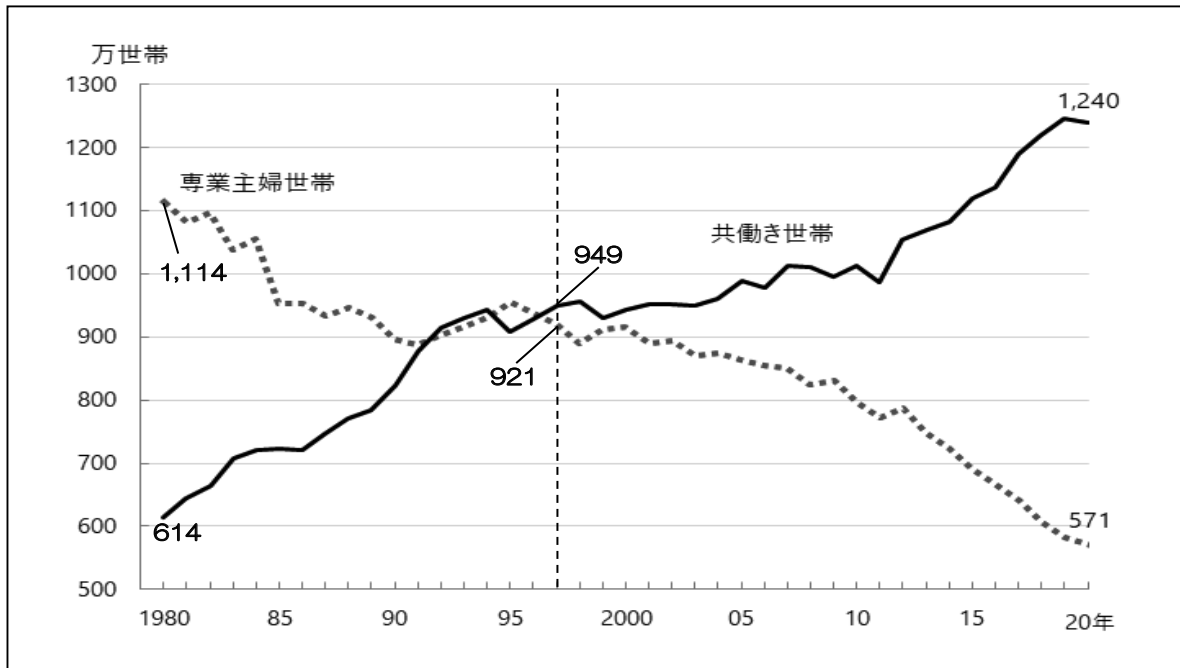
●学校推薦型選抜（公募入試／指定校入試）

【小論文】（試験時間：60分）

下の図1は専業主婦世帯と共働き世帯の推移を示したものです。表1・表2は、12歳未満の子どもを育てる夫婦の1日の平均家事時間・育児時間を表しています。

これらの図・表から読み取れることを記述してください。その上で夫婦（父親と母親）が子育てをすることについて、あなたの考えを述べてください。（800字以内）

図1 専業主婦世帯と共働き世帯推移



資料出所：総務省統計局「労働力調査特別調査」、総務省統計局「労働力調査（詳細集計）」
 出典：独立行政法人労働政策研究・研修機構「早わかりグラフでみる長期労働統計」より作成

表1 1日の平均家事時間（単位：分）

調査年	妻		夫	
	平日	休日	平日	休日
2008年	278	305	31	62
2013年	280	298	31	59
2018年	263	284	37	66

表2 1日の平均育児時間（単位：分）

調査年	妻		夫	
	平日	休日	平日	休日
2008年	455	572	75	273
2013年	572	691	89	309
2018年	532	680	86	322

表1・表2：妻の年齢が50歳未満で12歳未満の子どもと同居の世帯が対象

有効回答数（有配偶女性）第4回2008年：6870票、第5回2013年：6409票、第6回2018年：6142票

出典：国立社会保障・人口問題研究所「2018年社会保障・人口問題基本調査 第6回全国家庭動向調査」より作成

●編入学試験

【小論文】（試験時間：60分）

下の表 1-1～2、および表 2-1～2 は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の中での、勉強時間を除いて子どもがテレビやスマートフォン、ゲームなどを見ている時間（スクリーンタイム）についてのアンケート調査の結果です。

これらの表から読み取れる、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が子どもに及ぼした影響について記述したうえで、新型コロナウイルス感染症による子どもの心身の健康への影響について、あなたの意見を 800 字以内で論じてください。（資料出所：令和 3 年版『厚生労働白書—新型コロナウイルス感染症と社会保障—』令和 3 年 7 月）

表 1-1 スクリーンタイムの増減（第 1 回調査） (%)

	今のほうが長い	変わらない	今のほうが短い	わからない・ 答えたくない
小 1_小 3 (1361 人)	84.7	14.3	1.0	0.0
小 4_小 6 (1026 人)	86.1	12.4	1.6	0.0
中学生 (569 人)	85.6	12.7	1.2	0.5
高校生 (344 人)	79.7	16.3	2.9	1.2

表 1-2 スクリーンタイムの増減（第 3 回調査） (%)

	かなり増えた (プラス 2 時間以上)	増えた (プラス 1～2 時間)	だいたい同じ ／ 変わらない	減った (マイナス 1～2 時間)	かなり減った (マイナス 2 時間以上)	わからない・ 答えたくない
小 1_3 年 (1361 人)	10.2	34.5	50.3	3.2	1.1	0.7
小 4_6 年 (939 人)	15.0	38.3	42.5	2.4	1.1	0.6
中学生 (474 人)	19.0	37.3	35.9	4.2	3.2	0.4
高校生 (317 人)	17.4	24.6	48.9	5.0	2.2	1.9

表 2-1 一週間のスクリーンタイム（第 1 回調査） (%)

	～ 30 分	30 分～2 時間	2～4 時間	4～6 時間	6～8 時間	8 時間以上	わからない・ 答えたくない
小 1_小 3 (1361 人)	3.9	29.2	38.4	18.8	6.0	3.6	0.1
小 4_小 6 (1026 人)	2.8	25.0	37.4	20.5	8.3	5.4	0.6
中学生 (569 人)	1.9	18.5	27.9	25.1	13.4	11.8	1.4
高校生 (344 人)	3.2	17.2	23.8	23.8	11.3	16.0	4.7

表 2-2 一週間のスクリーンタイム（第 3 回調査） (%)

	30 分未満	30 分以上 2 時間未満	2 時間以上 4 時間未満	4 時間以上 6 時間未満	6 時間以上 8 時間未満	8 時間以上	わからない・ 答えたくない
小 1_3 年 (1361 人)	6.5	51.3	32.9	6.5	1.9	1.0	0.0
小 4_6 年 (939 人)	6.9	41.2	36.0	9.6	3.5	2.0	0.7
中学生 (474 人)	5.7	33.5	37.6	13.1	5.3	4.0	0.8
高校生 (317 人)	3.8	28.4	34.7	17.4	8.5	4.1	3.2

資料：国立研究開発法人国立成育医療研究センター「コロナ×子どもアンケート第 1 回調査報告書」及び「コロナ×子どもアンケート第 3 回調査報告書」の原データを元に政策統括官付政策立案・評価担当参事官室において作成。

(注) 第 1 回調査は 2020 年 4～5 月実施、第 3 回調査は 2020 年 9～10 月実施。すべて「保護者回答」（第 1 回は 0～17 歳の子どもの保護者、第 3 回は 0 歳～高校 3 年生（相当）の子どもの保護者）。「スクリーンタイムの増減」は 2020 年 1 月と調査時点との比較、「一週間のスクリーンタイム」は調査時点一週間の平均。

●出題意図

総合型選抜 9月入試【出題意図】

子ども学部学びの中心は「子ども理解」にある。それには子どもの心に寄り添い、子どもに共感しようとする姿勢が必要とされる。また、そのために子どもを取り巻く家庭環境や社会状況への関心と理解も重要となる。2022年度子ども学部総合型選抜9月入試の小論文ではこのことを入学後に見据え、「子ども理解」の基礎につながるテーマを出題に取り扱った。設問はコロナ禍における若年層の自殺増加を背景に、幸福をめぐる「子どもの生きやすさ」について述べられた文章を読み、筆者の考えを踏まえた上で、自らの考えを600字で論述するものである。「子どもの生きやすさ」をいかに捉え、社会問題などと関連づけて論述できるかが出題のねらいである。出題に取り上げた文章は朝日新聞のコラム『多事奏論』〈子どもの生きやすさ「いつも幸せじゃなくていい」〉(岡崎明子、2021年6月30日)の全文であり、筆者の岡崎明子は朝日新聞科学医療部次長を務める記者である。また本出題は高等学校学習指導要領「家庭」の学習内容である「子どもの発達と保育・福祉」にも準じている。

論述にあたっては、設問および提示された文章をよく読み、筆者の考える「子どもの生きやすさ」が何であるかを理解しなければならない。筆者はコロナ禍における子どもの自殺増加の理由として、子どもたちが家以外の居場所を失ったことに理解を示しつつも、他にも理由があるのではと子どもの自殺増加の真相に迫ろうとする。その解明の手がかりとして、筆者は「自殺希少地域」で知られる徳島県旧海部町の人々の生き方と幸福観について、社会学者岡檀(まゆみ)の調査結果を引用しながら言及する。それによれば、この地域の人々は幸福度を始め、物事をゼロかイチの二元論で捉えない人が多く、それゆえに自殺率が低く、楽に生きられるのだという。また、この知見をもとに徳島県内の子どもたちがいかに「未来を生き抜く力」を身につけていくかという過程を追跡中の岡の調査では、社会の規範を押し付ける大人が周囲に多いと、想定外のことが生じた際に対処できる力が弱まる傾向が浮かび上がってきたという。

筆者はこれらの調査結果を受けて、「人はだれしも幸せであるべきで、幸せを追い求めるべきだ」との規範が近年強まっている傾向を国連などの国際機関が行う各国幸福度ランキングやSNSにおける幸福のアピールなどを例に挙げて疑問視する。そして「常に幸せでなくては」という価値観を大人たちが強化してきたことが、子どもたちに孤立感と絶望感を生み出し、自殺を増加させた理由であると悟る。したがって筆者の考える「子どもの生きやすさ」とは、政治や社会が生死に関わる苦境を取り除いた上で、「常に幸せでなくては」というこだわりを大人たちがなくすことであることが最後の一文から読み取れる。

このような筆者の考えを踏まえて、「子どもの生きやすさ」について自らの考えを論述するには筆者の言葉を適切に引用し、筆者の考えを批評しつつ、独自の視点から問題の指摘や提言を行い、論を展開することが求められる。コロナ禍によって露呈した子どもの問題については社会問題に言及しながら、自らの言葉で論理的な文章作成を行うことが重視される。

総合型選抜 10月入試【出題意図】

本出題では、設問に対し、下記の点について自分の意見を分かりやすい文章で表現することができるかをみる。

- ①グラフを読み取る力をみるとともに、グラフから新型コロナウイルス感染症による影響の肯定的な側面と否定的な側面の両方を見出し、それらの要点を自分の言葉で分かりやすい文章で表現することができるか。
- ②①の両側面をふまえ、子どもたちにとってどのような学校が望ましいかについて、自分の意見をしっかり論じることができるか。

新型コロナウイルス感染症は学校や子どもたちにも大きな影響を与えており、国立成育医療研究センターの社会医学研究部・こころの診察部を中心としたグループによって調査された子どもたちの新型コロナウイルス感染症の影響の調査結果からは、新型コロナウイルス感染症の現状の否定的な側面を見ることができる。しかし、一方で肯定的に捉えられる側面も見出すことができる。否定的な側面はメディアや社会が注目しやすい点であり身近な話題となりやすいが、実際の子どもたちがどう感じていて何を求めているのかに気づき考えていくことが重要な視点である。

今回の出題は、新型コロナウイルス感染症が子どもや学校に与える否定的な側面だけではなく、肯定的な側面にも着目することで、子どもたちの実際を知り、それに対して学校がどうあることが望ましいのかについて自分の考えを分かりやすく述べることができるか(分析力・思考力・表現力など)を問う問題である。

総合型選抜 12月入試【出題意図】

社会の変化への対応、また、日本の若者や子どもの英語が話せない、規範意識が低下している、主体的な学びができない（学習意欲が低い）などの「教育の失敗」への対応として、学校教育にはさまざまな改革が求められてきた。2000年代以降をみても、総合学習、体験学習、キャリア教育、食育、小学校への英語必修化、道徳の教科化、アクティブ・ラーニング、ICT教育（プログラミング教育）などなど、これからの時代を生きるために必要な知識やスキルということで、学校教育で重点的に取り扱うことが求められるようになってきている。しかし、これらの改革は学校への過剰な期待ではないのか、あるいは期待をかけるのは仕方ないにしてもそれを学校が達成していくための環境はどうかといったことに対して、そのテーマを扱った文章を参考にしながら、自身の見解を説得力を持って論じることができることは、子ども学を学ぼうとする者にとって必要な力だといえる。

この出題によって、以下の3つの観点を評価する。一つとして、本文の要点を述べるところでは、本文をしっかり理解して簡潔にまとめる読解力や文章力があるかをみること。二つとして、国や社会が学校に対して過剰な期待をかけていることの具体的な例を挙げるところでは、教育や子どもに関わる問題について普段から関心や知識を持とうとしているかをみること。そして三つとして、考えを論じるところでは、学校教育に過度な期待がかけられているという主張に対して自分の意見を説得力をもって論じることができるかをみること。

学校推薦型選抜（公募入試／指定校入試）【出題意図】

わが国では平成11年6月に男女共同参画社会基本法が施行され、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」（男女共同参画社会基本法第2条）の形成を目指してきた。特に女性の政治・経済などへの社会進出や男性の育児休業取得率の向上に向けて法律や制度も整備され、男女の人権の尊重を柱に、近年では男女が協力して家事・育児・介護等を行うという意識の醸成が図られている。

高等学校学習指導要領「家庭」の2つの科目「家庭基礎」「家庭総合」の目標には、それぞれ「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を通して、様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を次のとおり育成することを目指す」と示され、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）や男女共同参画社会の推進についての学習内容が明記されている。

このように、男女が相互の協力と社会の支援の下に、子育て・介護その他の家庭生活における活動について家族の一員としての役割を円滑に果たしていくことが、現代社会では強く求められている。

出題においては、専業主婦世帯と共働き世帯の推移と妻と夫の平均家事・育児時間の調査結果を示した。共働き世帯の増加に伴い、夫婦それぞれが家事・育児を行う時間はどう変化しているか、関連付けて読み取ることが必要となる。その上で、男女共同参画社会の実現を想定し、男性の育児参加を含めて夫婦（妻と夫、母親と父親）が協力して子育てをすることについての考えを論じてもらうこととした。グラフ・表を的確に読み取り、男女共同参画社会やそれに対する現状の認識をふまえた上で自身の見解を論理的に表現できる能力（思考力・判断力・表現力）を評価する。

編入学試験【出題意図】

今般の新型コロナウイルス感染症は私たちの生活に大きな影響をもたらした。これまで誰も経験したことのない生活の変化は、子どもたちの心身の健康にも様々な影響を及ぼしていると考えられる。

このような状況についての最新の調査結果の一部を示すことで、子ども学部を志望する学生の、「子ども」に対する関心の高さや知識の豊富さ、理解力や分析力（思考力）、具体的な資料や自分の意見をもとに論理的に論じることができる力（表現力）を問う問題である。